

那賀郡桃山町最上所在

最上廃寺発掘調査概報Ⅱ

1982. 3
和歌山県教育委員会

序

最上庵寺は那賀郡桃山町に所在する県下有数の白鳳時代の寺院跡であります。昨年に引き続き発掘調査を実施し、貴重な資料を得、調査を通じて地元の方々にも最上庵寺の重要性について深い認識と理解がもたらされていることは望外の喜びであります。これからも発掘調査の実施だけでなくその普及、啓蒙活動にも力を入れたいと考えております。この概報が広く一般に活用されまして文化財保護意識の高揚に役立つことを願うものであります。

昭和57年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高橋正司

例　　言

1. 本書は、和歌山県教育委員会が昭和56年度国庫補助金をうけて「重要遺跡範囲確認調査」として発掘調査を行なった那賀郡桃山町最上に所在する最上庵寺の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、和歌山県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託し、最上庵寺発掘調査委員会の指導のもと、文化財課技師藤井保夫、社団法人和歌山県文化財研究会技術員富加見泰彦が担当した。
3. 調査に際し、快諾くださった土地所有者の方々と、御配慮をうけた桃山町教育委員会に記して感謝を表わしたい。
4. 本書の作成は、和歌山県文化財保護審議委員の指導、文化財課技師、社団法人和歌山県文化財研究会技術員諸氏の助言、協力を得て富加見が担当した。なお調査、整理において大阪市立大学学生横山洋、大谷女子大学学生森下牧子氏の協力を得た。

調査の組織

最上庵寺発掘調査委員会

調査委員 羽磨正信 和歌山県文化財保護審議会委員

巽三郎 *

都出比呂志 *

藤沢一夫 *

竹中一雄 桃山町文化財保護委員会委員

仁木正雄 桃山町教育委員会教育長

調査員 藤井保夫 和歌山県教育委員会文化財課技師

富加見泰彦 和歌山県文化財研究会技術員

事務局 事務局長 海野正幸 和歌山県文化財研究会事務局長

* 幹事 桃野真晃 県文化財課第2係係長

* 主事 宮本登志夫 * 主事

第1章 調査のいきさつ

那賀郡桃山町最上に所在する最上廃寺は、白鳳時代に建立された寺院址である。古瓦が以前から出土し、塔跡基壇と心礎石が現存していることから、関心の寄せられていたところであった。

ところが、西部縦貫道路の計画が持ち上り、それによると予想される寺域の一画を横切るものであったため、これに対処するための基礎資料の必要性から昭和55年度より国庫補助をうけ三ヶ年計画で調査を実施するに至った。本年度はその第Ⅱ次調査で、昭和56年度12月に始まり、翌年2月に終了した。

第2章 位置と環境

那賀郡内における白鳳期の寺院址は岩出町西国分に所在する西国分廃寺、桃山町最上に所在する最上廃寺、貴志川町丸柄に所在する北山廃寺の三廃寺である。

西国分廃寺は紀ノ川北岸の河岸段丘上に、最上廃寺は紀ノ川をはさんで対岸の河岸段丘上に、そして北山廃寺は紀ノ川の支流である貴志川の西岸つまり船戸山の東麓に立地し、三廃寺は紀ノ川・貴志川をはさんで対峙するように位置している。三廃寺にみられる共通点は子葉大型形式の単弁鎧瓦を有することで、紀ノ川流域の古代寺院の中では特異な存在であるといえる。

ところで、最上廃寺の所在する一帯は旧荒河郷であり平安末期には「修禪尼（美福門院）」が後鳥羽上皇崩御後この地に移り堂塔を建立したといわれる地である。「古事記」「日本書紀」の所伝をそのまま信ずることはできないが「荒河刀弁」^(注2)の名がみられることから、早くからこの地が開かれ、しかも朝廷と深い関わりをもっていたことは容易に推測できることである。

第3章 調査

昨年度の調査 塔跡以外の造構について全く不明であったため、塔跡の調査とそれ以外の造構の確認および寺域の範囲確認を主目的として調査を実施した。

しかしながら、広範囲にわたってトレントを設定したものの主要伽藍の検出には至らず、奈良時代と考えられる掘立柱建物跡を検出したにすぎず、寺域についても、旧地形の復元からおおむね察視はついたもののそれらを示す溝跡・土塁跡あるいは築地跡といった造構は検出できなかつた。塔跡については、トレントによる調査を行ない、塔を取りまく一辺15メートルの外周溝の痕跡を検出した。また基壇は真北より5度余り東へ振れていますこと、構築法については3~5cmの厚さで粘質土と砂礫土によって交互に版築が行なわれていることが明らかになった。

今年度の調査 調査の対象をYG-1、HG区区とし、再度主要御籠の検出、寺域の確認に目的を置いた。調査区は果樹畑であるため、トレンチによる調査を行なった。

YG-1区

Hトレンチ 昨年調査したAトレンチで巾50cmの東西に延びる溝を検出し、この地点が塔より北80尺にあたるため金堂跡あるいは講説跡等の雨落ち溝とも考えられたので拡張して調査を行なった。溝は近世の整地によって削平をうけており、確認は得られなかった。しかし、東西に拡張したトレンチ西端において掘立柱建物跡の一部を検出した。

Iトレンチ 塔の西側に東西に設定したトレンチである。トレンチ東側で東へ傾斜する地山の整形痕と柱穴を検出、そのためトレンチを南北に延長してこの整形痕の調査を行なったが瓦等の堆積も全くみとめられず、金堂跡の東辺基壇線と断定する資料は得られなかった。

Jトレンチ YG-1区のほぼ中央部に設定したトレンチである。トレンチ中央において東西に延びる幅40cm深さ約20cmの溝を検出した。遺物は検出されなかった。

Mトレンチ Iトレンチとはほぼ平行に設定したトレンチである。N12より北側では瓦の多量の出土をみたが近世の整地によるものと考えられる。またHトレンチにまたがって中世の土壤を検出した。

HG区

Pトレンチ トレンチによる調査で幅1.8m深さ0.1mの瓦片を含む浅い溝を検出した。そのためトレンチを拡張して調査した。その結果、溝は西側で「L」字に曲がることが確認された。

Oトレンチ 遺構遺物は検出されなかった。

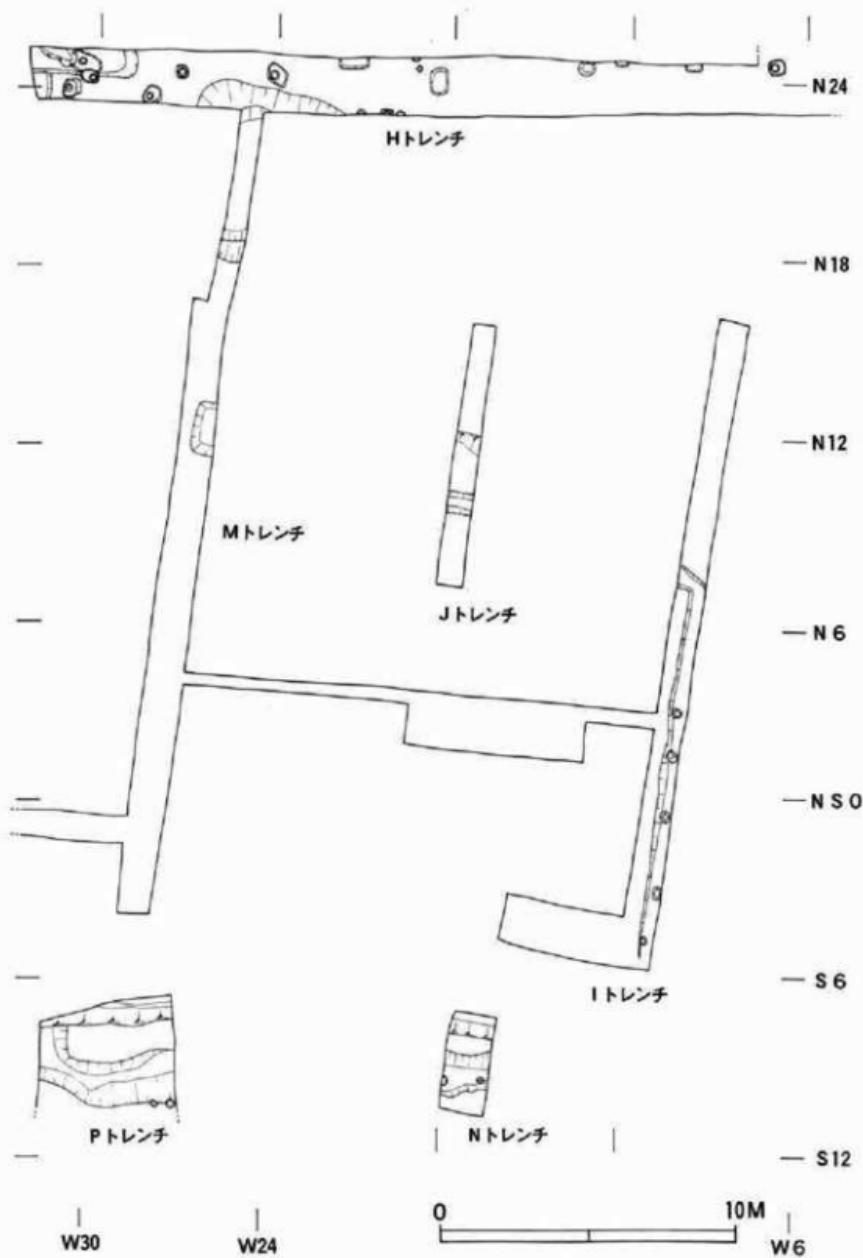
Kトレンチ 南限を調査するため塔よりS48の地点に設定したトレンチである。遺構遺物の検出に至らなかった。

Lトレンチ Kトレンチと同様、南限を調査するため塔よりS30の地点に設定したトレンチである。遺構遺物の検出に至らなかった。

Nトレンチ Pトレンチで確認した浅い溝状遺構の広がりを調査するため設定した。その結果幅



第1図 調査地点（斜線部）



第2図 YG - I 区・HG 区 平面実測図

1.5m深さ0.1mの浅い溝を検出した。

第4章 遺 物

出土した遺物は、白原時代の軒丸瓦・丸瓦・平瓦・平安時代の黒色土器・中世の土師器皿・小皿・燭台等である。

軒丸瓦（第3図、図版3上） A・B類とも出土した。A類が13個体、B類が1個体でA類が圧倒的に多い。A類は八葉からなる単弁蓮花文軒丸瓦で、瓦当径は18.4cm、最大弁幅2.5cm、周縁幅1.5cm、高さ1.3cmで素文である。中房・蓮子数については今回の資料では不明であるが、昨年度の良好な資料によると中房径約5cmで1+6の蓮子を持っている。胎土中に結晶片岩・雲母を含み比較的砂粒が多い。焼成は良好で色調は灰褐色を呈す。B類は八葉からなる単弁蓮花文軒丸瓦で花弁中にやや大型の子葉をもち、間弁は花弁より高く隆起し、周縁より1cm高い。瓦当径は約18cm、最大弁幅2.2cm子葉幅1.2cm、周縁幅1.4cm、高さ1cmで素文である。中房径3cmで1+4の蓮子を持っている。胎土中に結晶片岩を含む。焼成は良好で色調は暗灰色を呈す。

整作技法はA・B類とも芯に粘土を入れる際、中房の部分に先に入れこみ、のち内区をつくり次に裏面に丸瓦をあて、粘土を足して固定すると共に周縁部をつくっていると考えられる。

平瓦（第3図、図版3-中） 桶巻き四枚づくりによるものである。狭端部の幅は25.7cmで模骨については9ないし10列観察できる。凸面には格子叩き目が残る。凹面の布目痕は比較的荒い。胎土中に結晶片岩・石英・雲母を含む。焼成は良好で色調は黄褐色を呈す。

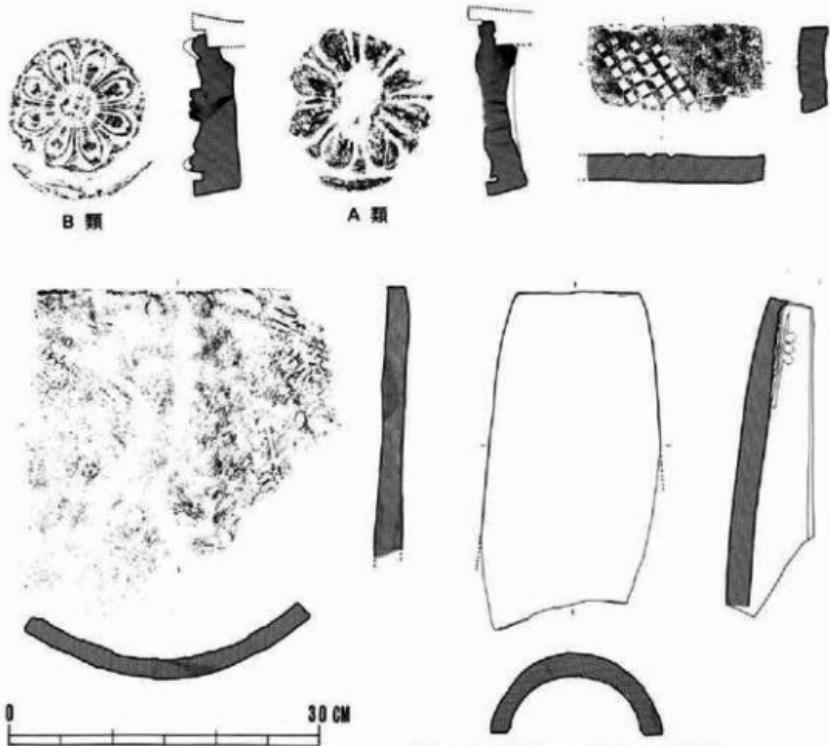
丸瓦（第3図、図版3下）行基葺瓦と玉縁付瓦の二種が出土しているが行基葺瓦が圧倒的に多く出土する。凸面はていねいにすり消されている。凹面には布の合わせ痕が顕著に残る。胎土中に微砂を含む。焼成は良好で須恵質を呈し、色調は青灰色である。

製斗瓦（第3図） 平瓦を利用したもので幅8.4cm、厚さ2.8cmを計る。全長については不明である。

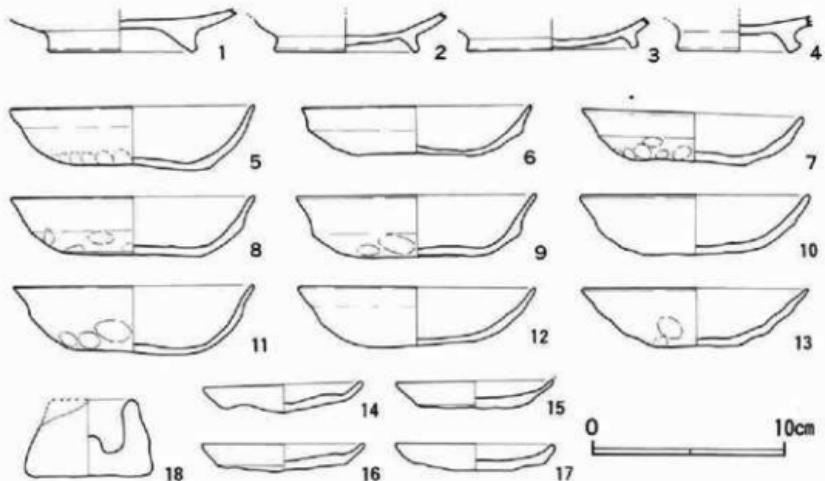
黒色土器（第4図1～4） 底部のみの出土で詳細は不明である。やや外方に張り出した高台がつけられている。高台と底部外面はナデによって仕上げられている。胎土は砂粒を若干含みやや軟質である。

土師器皿（第4図5～13） 表面が剥離しているため詳細は不明であるが、底部外面には粗い指圧痕を残している。幅の広い平底からやや内弯ぎみに外上方へ立ち上るもの、やや外反するもの、幅のせまい平底から内弯ぎみに外上方へ立ち上るものがある。胎土は微砂粒を含むが、精緻である。焼成は良好で白黄色を呈している。

土師器小皿（第4図14～17） 口径約8cm、器高約1cm前後のものが多い。底部外面には指圧痕が残り、内面・口縁部はナデによって仕上げられている。胎土は微砂粒を含むが、精緻である。



第3図 出土瓦 拓影及び実測図



第4図 出土遺物

焼成は良好で赤褐色、灰褐色を呈するものがある。

燐台 (18) 灰褐色を呈し、胎土中に微砂を含む。焼成は良好である。

第5章　ま　と　め

遺構　今回の調査において検出した遺構は I・J・O・P 各トレンチの溝状遺構と H トレンチで検出した掘立柱建物の一部と中世の土壤である。溝状遺構はその平面プランが「コ」の字形を示し、塔跡の西側に位置することから南面する場合、金堂跡の雨落ちとも考えられたが、溝によって区画された規模が一辺 18m × 19m であること、溝内からの瓦の出土が極めて少ないと、塔跡に近接しすぎること等から金堂の雨落ちとは考え難い。H トレンチで掘立柱建物跡の一部を検出したが昨年度の調査においても B・C・G・OM-I 区で掘立柱建物跡を検出しており塔跡北方に掘立柱建物群が存在することが改めて確認できた。しかしながら、これらの建物群が坊舎を示すものかあるいは寺院に先行するものであるかは今のところ不明である。

瓦 A・B 類とも出土したが、B 類の良好な資料を得ることができた。これと同類と考えられる瓦に奈良県坂田寺・久米寺・片岡尼寺等があげられ、^(註 3) 西国分庵寺・北山庵寺と共に那賀郡内の寺院が大和のこれら寺院と密接な関係にあったことは十分考えられるところである。

ところで、紀伊に存在する白鳳期の寺院址は伊都郡にその分布をみる藤原宮式複弁鎧瓦を有する一群(古佐田庵寺・神野々庵寺・名古曾庵寺・佐野庵寺)、川原寺式複弁鎧瓦を有する一群(神野々庵寺・名古曾庵寺・佐野庵寺・薬勝寺・田殿庵寺・三柄庵寺)、那賀郡にその分布をみる単弁蓮花文鎧瓦を有する一群(西国分庵寺・北山庵寺・最上庵寺)、那賀郡・旧名草郡に多くみられる複弁蓮花文鎧瓦の子葉上面が凹む法隆寺西院建立時の瓦と同様の鎧瓦を有する一群(西国分庵寺・山口庵寺・上野庵寺・薬勝寺)の四グループに大別できる。この中で広い分布を示す川原寺系統を除いては郡単位のまとまりを持っていると考えられる。それが如何なる要因によるものであるかは今後の調査・研究によるところが大である。

註

註 1 「最上庵寺発掘調査概報 I」1981 年参照

註 2 「御真木入日子恵命、坐師木水垣宮、治天下也、此天皇、娶本國造名荒河刀弁之女」^{刀弁二丁目}、¹⁸⁸⁴ 達津年魚目々微比売、生御子、豐木入日子命、次豊組入日亮命(後略)」「古事記」中「二月辛亥朔丙寅、(中略) 又妃紀伊國荒河戸畔女、達津年魚眠眼妙媛、生豐城入彦命、豐歌入姫命、(後略)」「日本書紀」五

註 3 「飛鳥・白鳳の古瓦」1982 年 奈良国立博物館編

註 4 「法隆寺古瓦展」1978 年 法隆寺

「法隆寺の古瓦」1978 年 法隆寺

註 5 他に府中遺跡・直川遺跡・太田・黒田遺跡からも出土しているが寺院址であるか否か不明なため除いた。



最上廐寺遠景



P トレンチ溝状造構



I トレンチ地山整形痕



II トレンチ掘立柱建物



出土瓦

昭和57年3月30日印刷

昭和57年3月31日発行

最上庵寺発掘調査概報 II

編集 和歌山県教育委員会文化財課

発行 和歌山県教育委員会

印刷所 邦上印刷

